

見たことは書こう、書くには

加藤 憲一

1945(昭和20)年秋、私たち県立鳥取二中の3年生は工場から学校へ帰り、軍隊が徴用していた教室を再使用するため汗を流していた。しかし、休日には、母にねだって古い蚊帳地で作ってもらった補虫網を持って野山へ出かけることもできた。それまでの数か月、工場の油臭の中で小さくなっていった14才の少年にとって、もう会えないと思っていた兵役帰りの兄といっしょの山路や谷川は、自由と歓喜があることを知らせてくれる道であった。学校での戦後の新時代の息吹きは、運動部以外の文化部(文芸、図書、科学班など)の再建と新聞部の創設にも見られた。私は何気なく科学班に入ったが、そこでは、理科室の出入は自由で、先生方は教壇で見るとはちがった個性で生徒に対応して下さっていた。後では、戦時の諸情況が教師の個性発揮を抑圧していたと気づくが、当時は急にあらわれた先生の個性にふれたり、友人との交流が楽しくて理科室に出入りしていたように思う。物理を教えていただいていた永見一男先生は50才ぐらいであったであろうか。実は天然記念物ヒサマツミドリソウジミの発見・命名者であることや、まだ20才台の青木浩先生は北大動物のご出身で昆虫学専門であることなどを知った。青木先生は放課後しばしば近くの山に昆虫採集に連れて行って下さった。それまで蝶や大型甲虫にしか興味がなかった私たちに、石や枯木の下に潜む昆虫や食草のことなど生息環境との関係に目を開いていただいた。このとき聞いたお話が科学班の人たちのテーマ、例えば“花に集る昆虫”のようにして生かされた。2月のまだ寒気のとけぬころ、ニホンアカガエルの卵を持参され、卵割を見せてくださった。古い一ツ目の解剖顕微鏡の下で見る割溝の形成に接したときの驚きはいまでも新鮮な記憶である。こうして書いていると、ルスコニー氏溝(陥入口の別名)という名称も教わり、それに対してチンダル現象と同じように、不思議なアカデミズム的感じを受けたことも思い出される。——数年前学研映画“卵から親へ”の製作協力を依頼されたとき、あのときのことがしのばれ、先生へのお礼の一端になるかもと思った——。この卵の

観察中、“見るだけでなくスケッチしたら”と、ご自身の大学時代の上手なスケッチを見せて下さった。これをまねてみて、線と点とがどんなに多くのことを表現するか無言のうちに教わった。また、両先生はご自身の論文別刷を私たちに下さりもした。先生の机上には〇〇学雑誌の類もおいてあった。それらは、当時の教科書や参考書に接したものにしてみれば大きな違和感を与えるものであった。教科書に書いてあることが学問と見ていたのに、それは教わり覚えるもののように、論文という——どうやら学問らしいものは、教科書とはちがうらしいということである。

私たちは、この不可思議な論文体に挑戦することになった。科学班の各自が観察や簡単な実験について書いて、自分たちでガリ版を切り謄写印刷をして、“科学班報告”なる冊子を作った。2回出して卒業後も、新制高校生となった後輩たちといっしょに“鳥取ネオ生物会誌”として3年間続けた。そのころ青木先生を介して面識をいただいた疎開帰郷中の太田行人先生(後の名大教授)のお宅へ時折訪ねていった。私たちのねだりに負けて、この小冊子へ一文を下さった。大事に保存しているはずの実物が見当たらないのが残念であるが、その内容は今でもよく覚えている。先生は恩師田宮 博先生からお聞きになった物理学者ディラックのことば“you must not begin your sentence until you know how to end it”を引用され、ここでいう sentence は work と理解したらよく、“仕事はその途中で絶えず経過と結果について考えながら進めて行くことが大切である”という文意であった。私たちのつたない冊子をご覧になり何かを感じられ書いて下さったのであろう。

今50歳をすぎ、身にすぎた良師にめぐまれていたとしみじみと感ずる。それにもかかわらず、私自身何程のこともしないのは申しわけのない痛根事である。しかし、私がお会いしたような教師がたが、必ず各地で、今日もまた生徒に接しておられると思う。私の経験はその流れの一つであろうが、個人にとっては重いものである。

かとう けんいち 大阪教育大学生物学教室